日本女醫会誌
復刊第31号

副会長に就任して

松岡宏子

私が理事になりましたのが、昭和三十三年、九年間にわたり、理事会の出席率がよく、会の動向も割合によく知っているということで、副会長に選出されたものと思っております。三神会長は女子医大のお仕事だけでも院長、教授、理事等大変ご多忙な方ですから、唯々会長を補佐して、少しでも、会のためにお役に立てればと存じております。

日本女医会はどうしても各自の同窓会から離れて、「女医の団体」にならなければならないというのが、私の長い間の念願でした。潜越ながら、吉岡弥生先生も、おそらくそういう女医の親睦を考えられて、日本女医会を創立されたことと思います。それは会則第一条にもはっきりと明示されております。しかし戦後日本女医会が再発足された当初から今までは、会員を集めることに汲々としていたし、お互いを知りにくかったことから、便宜上役員を決める際、各同窓会から選出しましたが、もうこの制度から脱皮してゆかなければという気持が強くなってきました。又何かよい仕事をしたいということも会員の多くの方々が考えておられるようです。この五月の総会でも会則の改正の必要を感じ、この度会則改正案を作成するはこびとなりました。

これらは、女医会は何をしているのか、と思われていることがあったとしても、少しずつの会の成長であって、今までの歩みがあればこそのあらわれであると思います。

何か小さなことでも、よい仕事をしたいということは、理事会でも常に考えていたことです。それがなかなか実行にうつせなかったのは、まず会員には勤務の方と開業の方があり、女医として現在活躍している多くの方々があれば、家庭婦人として忙しくしておられる方もあります。又会員が一か所に集まって住んでいるのではなく、全国各地にちらばっております。その個々の環境のちがいがずい分大きな原因だと思います。たとえば、日本医師会、都又は県医師会のような組織になると、開業している人たちにとっては、勤務の方たちに比べ、より身に直結したつながりがあり、かつその下の地区医師会をみますと、その地に住んでいても、勤務している人たちならば入会していなくても済むし、多くの開業医にとっては、時には大きな保護もうけたり、自分の生活に必要なものでもあります。

個人的なことで申し訳ありませんが、私などはまだまだ寝食を忘れて日本女医会のためにだけ働くことはできません。今は自分の仕事で生きてゆかねばならないからです。会員の中にも、自分の仕事の片手間にしかできないという方もおられるかと存じます。しかし片手間だから会に対して情熱がないとか、無責任にしか仕事ができないというのではありません。その片手間が沢山集まって、みんなが参加できる仕事を望んでおります。たとえば東京だけでしかできない仕事は、その仕事に携わった人ばかりが忙しくなり、仕事を長つづきさせるのには、むずかしさというか、無理が生ずると思われます。全国各地におられる会員の皆様が在所で、余り無理な犠牲を払わないでできる仕事を、じっくり考えて、途中でたちぎえにならないような仕事をしたいと思います。

それには各同窓会を離れての和、親睦がほんとうに密になった時、そこからもり上る力が自然によい仕事を生み出してくれるのではないでしょうか。

これからの三年間、私にとりましては、本当に重すぎる任務ではありますが、無事に責任を果したいと存じております。ただ安全主義という消極的な意味ではなく、まっすぐにすじを通してゆきたいと思っております。

しかし、これは一人でできるものではありません。会員の皆様のご支援とご協力によって、はじめてできることであります。

私は、日本女医会という大きな家の台所で働くつもりでやってゆきたいと思っております。どうぞどうぞ少しでもよい会に成長してゆきますように心から祈っております。

国際女医会より

小野春生

先日国際女医会本部、ウイーンより参りました手紙によりますと、本年五月二十二日より二十四日まで行われました常任役員会議で昨年ロチエスターでの総会で定まりました決議事項の、「各国政府へ要請する件」は必ずしも各国に適当でないということで、各女医会において適当と思われるのを選び、国際女医会の決議として各々の政府へ提出しても良いと定りました。しかし各事項の内容はそのまま変更せず提出されるようお願いするとのことでございます。またその時の各国政府の反応及び効果について伺いたいとのことでございます。

たしかに我国に対しあまり適していないことがありますが、他国の女医がどんな問題に直面しているかが明らかでありますので、興味深くまた皆様のご参考になると思いますので全文を書きました。ご意見をいただきたいと存じます。

国際女医会
第十回総会決議録

一、国際女医会は女性のすべての福祉に深甚なる関心を持っており、婦人の地位の改善は福祉の基本的部分であるので、投票権が全部の婦人にあまね

くあたえられることを主張する。

二、医学教育を受けた女性およびこれに関連した職業における婦人の不足は甚だしいものであり、また家庭への義務が女性の医学教育の完遂や医業に就くことをしばしば妨げるので、国際女医会として医学校や病院などに育児センターを設置することを奨励する。

三、現在医者不足は世界的な現象となっており、また医学教育費は非常に高いので、女医の力を最大限に利用するため、国際女医会は各国政府に、女医のための「ホームヘルパー」の費用を被課税収入から正当な控除をするよう主張すること。

四、保健福祉の計画はすべての婦人にとって重大な関心であり、また女医はこの計画に参加する資格があり、地方、国、または国際機関は女医の能力を一層利用すべきこと。

五、医学及びこれに関連した職業において女性に与えられた機会は限りがない。未婚、既婚の女性を問わずこの有意義な、かつ価値ある職業を国際女医会として社会に宣伝し、また職場斡旋の相談に応ずべきである。

六、国際女医会は緊密化して来た国際間の人物交換のため基金や施設を作り、大学院教育の機会をより多く与えて、国際機構または教育、医学機関に交渉すべきこと。

七、国際女医会は医学校に入学資格ある女性の数を増加する方法を研究し、各国女医会に要請すること。

八、女医の中には家庭への責任があるため医学の研究に全時間をついやしえない人があるので、大学院医学教育に一層融通ある方法を各国女医会が研究すべきである。

九、家庭人となり再び開業医に復帰する女医のために再教育をする方法を各国女医会で研究すること。

十、女医の多くは家庭への責任があるため、各国女医会は、「パートタイム」の職場を作る方法を研究すべきである。

十一、国連加入国で女医会のないところはその政府を通して、国際女医会の次の総会に二名の女医を「オブザーバー」として派遣するよう招待すること。(英国代議員の提案)

西独による決議―英国の動議に加えて国連に属しない東独もこの中に加えられることを提議した。

十二、国際女医会は世界保健機構に病院の建築には女医のための施設を加えることを要請する。

十三、国際女医会は本総会で通過されたすべての決議を加盟している各国女医会が属している国の厚生省又は同様な政府部局に送附されなければならない。

第十一回女医会総会

次回国際女医会総会は来年六月にウィーンで開催されることになっております。旅行の案はいろいろございますが、なるべく参加なさる方々のお望みをかなえたいと思いますので、ご意見ご希望を伺いたいと存じます。旅費につきましては一流のホテルに泊りたい方とホテルは二、三流でも旅費が安ければとおっしゃる方がいらっしゃると思います。どうか参加なさりたい先生のご注文をうかがいたくお待ち致します。

理事として

湯本アサ

この度至誠会総会において図らずも私が日本女医会の理事の一人としてご推薦いただきましたことは、まことに光栄に存じ感謝いたします。この上は理事会の一員として、会の企画運営に参画し、三神会長をたすけて、負わされた責務を全う致したく願うものです。

ただ現在の私は女子教育の多忙な場におり、医師としては学校保健の分野と公衆衛生の講義を担当しているにすぎず、医業業務から離れておりますのと、今まで日本女医会の本部運営には関与しておりませんので、皆様のご期待に添うためには私にとって大きな努力を要します。どうぞ皆様の暖かいご声援とご鞭撻をお願い申し上げます。

ここに理事就任に際して私の感想の一端を申し述べてご挨拶にかえます。

まず皆様から寄せられた私への期待は、この際新しい理事を加えようという意図が、私に向けられたものと考えられます。ただし新顔といっても明治生れの私が誇りとすることは、吉岡弥生先生ご存命中の学生で直接ご指導をたまわったということに止まると思います。そこで私は吉岡先生が女医に期待をかけられた人間像を日本女医会の中に生かしてゆけたらすばらしいことと思っています。進取的で建設的なそしてあらゆる障害を乗り越えて、いつも前向きな姿勢をとられた弥生先生、するどい先見の明とひろい国際的な視野を持っておられた先生が、いまここに生きておられたら、日本女医会に何を望まれ、どのように問題をさばいてゆかれるか、そこへ着想してゆくことが何よりも私に課せられた役目と考えています。

次に私の多少異質的な存在と思われる立場を生かして、皆様とは別な視野から多面的な意見を卒直に開陳して、巾の広い日本女医会の運営に役立てばとても嬉しいことと考えます。人間の運命というものははかり知れないもので、私は終戦後疎開先の郷里群馬県で軍政部の通訳をしたり、保健所長をしていましたが、軍政部からおされて県教育委員となり、公選二期八か年をつとめました。その後私の女学校の母校である横浜の成美学園から内紛に際し呼ばれて学園長を引き受けることになって、今年で心ならずも十二年目になりましたが、現在は神奈川県の公任県教育委員を昭和三十四年以来三期つづけています。女医としてこんな変り種もいるので、そんな点でお役に立てば望外の幸です。私の意見としては女医が単に医師業に従事している女性であるということだけでなく、世の多くの職業婦人の指導者として、また我が国におけるいろいろな社会活動を方向づける学識経験者として功献してほしいと望む者であります。先日Computopie (Computer による utopie をおこそう) とは何かという演題で茅誠司博士の話を伺いました。Computer (電子計算機) によって、世の中は驚くばかりに改造されて、科学労働者が肉体労働の代りだけでなく精神労働の代りにも使われていくであろうが、科学の極致を活用することは人類にとって必要な条件ではあるが、決してそれだけで人間の世界は十分ではあり得ない。人の心の微妙な働きには機械文明では到底支配し得ないものが残されるし、また人の心をどう変えてゆくかに精神的なものがあると結論されたのです。科

学の力だけが万能ではなく、返って不十分で思いがけない所に誤差や摩擦、反撥、破壊などが起りがちであり、時にそのすばらしい人知は返って悪用されて人類の滅亡をもたらします。

こんな時代に世界の人たちの心を結んで平和を維持するために、女医は国内だけにとどまらず、国際的にも活躍していきたいものです。

最近の国外旅行では欧米の主要都市で多くの日本人の旅行者に出合います。これはまことにすばらしい事実です。後期二十世紀はマスコミ時代とはいえ、眼から耳から入ってくることと、肌全体で感じる心の受けとめ方とは全く異るもので、百聞は一見に如かずという、その環境の中で実感をつかむことは国際理解の上にまことに大切なことです。私たちが外国へ行って女医どうしお互いに心と心のふれあいを持つことは重要なことで、医術を通し、芸能を通して、一人一人の善意を示しあい、くみとりあいたいものです。私は幸にも東京女子医専卒業直後海外留学やその後数回の海外視察の機会に恵まれていますので、皆さまの渡航のお手伝いなりとできましたら、まことに幸です。

この春、私はベルリンにおける第五回国際婦人会議に日本代表として文部省から派遣され、三十五年ぶりになつかしいドイツで二週間の楽しい時を過し得ました。この国際婦人会議は Frau Wilhelmine Lübke（ドイツ連邦共和国大統領夫人）が名誉会長で、特別講演はドイツ連邦厚生大臣 Frau Dr. Käte Strobel が「主婦の健康」について話されました。日本では主婦は職業欄には無職と書きますが、ドイツでは主婦が主婦業として職業人に考えられています。ですから家庭外で職業を持っている主婦は主婦業とダブって二重の職業に従事していることになります。してみると妻であり母である女医は、やはりこの二重の職業婦人の立場におかれているのです。日本女医会が主婦業に対して女性の生命を守り、その生活指導と保健指導に主導権を持ってほしいと思います。

さて、あれこれ考えてはみるもの、日本中の女医の共同体としての日本女医会が果してどんな活動を具体的におし進めていけるでしょうか。会員はそれぞれ出身校が別で、年令の開きがあり、環境が異り、そのうえ地域的にも全国にひろがっています。ただ共通なのはお互いが女医であるということだけなのであります。いいかえれば女医としての自覚と責任がこの共同体の唯一の原動力であります。全国の女医の力が結集されたら、どんなにか大きな力が産み出されることでしょう。お互いに小我を捨てて大我に生き、日本女医会が共同体としての目標をかかげてその使命を完うしてゆきたいと願います。

—▼◎▲—

白橋　美笑

女性のパーティがマッターホーンの北壁にいどみ登頂に成功したというビッグニュースにいささか驚いた。しかもその中の一人は女医で高地登山の生理学的研究のテーマをもってアルプスにいどんだという、日本の女性の一人として心から拍手を送りたい。

成功するまでの苦労は大変な事だと思うが、その一因として前後に男性四名とのチームワークを決して忘れる事はできない。

岩登りは女性には困難と言われてきた事を日本女性で、しかも女医がやったという事は世界中の人達を敬服させるに価する。

それにしても何事をやるにもチームワークの大事さを新たに思い知らされた。

日本女医会の一員としてチームワークの偉大さを再認識させられた次第である。

（四二、七、二八夜）

—▼◎▲—

野口　登志予

街の皮膚科開業医に過ぎません私が、母校鶴風会現理事であると言うことで、何の自信も抱負もなく、はからずも日本女医会理事に当選させていただき恐縮しております。私は先づ伝統ある日本女医会の歴史、使命、目的を勉強させていただき、諸先輩のご指導の下で、与えられました任務に努力致したいと考えております。素晴らしい才能とご努力の結果、教授、代議士等の要職にある方々を除き、女医は珍らしい存在ではなく、当初女医会存在理由に疑義を抱いた私でございます。又女医教育の節を保たれた至誠会所属の先生以外、男女共学の現在、若い先生方の中には、そのようなお考えをお持ちの方も多いのではないかとも存じます。しかし先般女性パーティだけでアルプス最高峰初登頂に成功された今井通子先生も本会会員であられるとか。女性も男性以上に立派に強くなりました。まして尊い使命に生きる女医のグループ、日本女医会は強大でございます。団結と教養と親睦、立派な目的と奉仕の精神を持ち得ましたら、有意義な団体に迄発展することでございましょう。

このような素晴らしい女医会のため、微力を尽させていただけます事を嬉しく存じます。諸先生方のご指導とご鞭撻を心からお願い申し上げます。

—▼◎▲—

ひとりごと

福田　貞

「実るほど　首を垂るる　稲穂かな」

折にふれ、思い出される句である。遠慮なく物を言う「無冠の大夫」のくせがどこでも抜けず、遂うっかりと、しゃべってしまう私。思い上った行動をしてはいないかと、時々不安になる。

そして、そのうっかりから、この大任ある女医会の理事を引受け、その器でないことも万々承知の上でのこと、汗顔の至り此上ない。日本女医会も、国際女医会に副会長を送って、益々多忙を極め、且つ範を垂れる意義ある会にならねばならないと思うと、かけだしの理事、何をなすべきか戸惑う次第!!

五月の総会で（総会は最高の決議機関）旧態依然（失礼）としていてはいけないとの声があり、四十二年度第一回の理事会で、一応会則改正委員会が発足することになった。

会則とは団体の運営には一つの〝きまり〟としてなければならぬもの、しかし、あまりきびしければ自縄自縛となり、あまりゆるやかでは篭の目のようになる。情ある、親しめる、そして或一点では儼然としたものでなければい。はてさて、むづかしきものよ！

評議員会は、これまで総会当日午前中に開かれていたが、お茶をにごすために開かれていたようなもの（私の知る範囲では総会前一回だけだった。この前まで評議員だったので、言葉がわるく相すみません）

評議員会は、もっと権威あるものでなければならない。（評議員会で否決

された問題が総会に出されるなどはもっての他である。何のために評議員会を開いたのか解釈に苦しむ）会の事情によっては、評議員会が総会に代る場合さえある程だから。

が、ここで問題が起る。権威ある（?）評議員会を年二、三回位開くには、全国の評議員の方々の旅費の件がからむ。従来のように総会のついでなら旅費は不要だが――。

年間金千円也の会費では、ソロバンが合わない。そこでベテランのお歴々の理事先生方、頭をしぼって、前記お茶をにごす評議員会しか開けなかった事と思う。心情察するに余りあり。

世の指導者たる先生方教えて下さい。どうしたらいいのか。

1　世の値上げムードに便乗すべきか？

2　金を儲ける事業をするか？

3　各支部の負担とするか？

但し2、はこのままの会では一寸出来ない、現在のままではせいぜい。バザー位。

其他何かよいチエはないかナー。会計担当理事の一員となった私、頭がいたい。

理事会はいつも日曜に開かれると聞いていた。これも理事を引受けた理由の一つだ。六月の第三日曜第一回（四十二年度）の理事会で、今後は第四土曜の午後と決定、ガッカリした。民主主義のルールに従い、毎月第四土曜はこまねづみのようにかけ廻ることにしよう。

放言多謝!!

――▼◎▲――

石田妙子

・新理事に選出されまして一言に云えば、狭い所より急に広い世界にぽっかりと出て来たような気がしております。

それは私が昭和二十六年東邦女子医専を卒業し、昭和二十七年より昭和三十九年に到る迄母校の眼科学教室に勤務し、以後開業して現在に到る迄私事にのみ終始してきたからです。

この私に対して、近来とみに若返りが盛んとなった鶴風会の理事会の余波を受けて、医専最後の卒業生の私が、理事に就任しましたのは昨年の事でありました。

其の上本年になり日本女医会の理事選出の際、女医会の会則の同窓会を母体としての一項により、図らずも若輩の私が理事に選出された次第であります。

ひるがえって日本女医会の現況を考えますと、日本女医会は諸先輩先生方の永年に亘るご努力により、近来益々盛大となり、各同窓会よりの任意の親睦団体より一つの法律的にも認められた大きな組織へと発展しつつある段階にあります。

又各同窓会の境界はとれて、個々の女医として広く手を握りあって一体となり、同一目的のために進んで行く方向にあります。

このため、現在の会則も改正され、特に各同窓会を母体とした理事の選出方法も自ら新しく生まれかわるものと考えられます。

このような時期に理事に選出され、且つ日本女医会の諸先生方と共に仕事をする機会を与えられました事に、感謝する次第であります。

未熟ではありますが、この広い世界に向い私なりに一つ一つ小さい努力を重ねて、会の発展に少しでもお役に立てばと思っております。

何卒、今後とも皆々様方のご指導をよろしくお願い致します。

――▼◎▲――

中田美奈子

日本女医会総会には昭和三十年頃から毎年出席しておりまして、会の組織とか運営とかがわからずながら年に一度ヴァカンスを兼ねて上京するのが大変楽しみでした。昭和三十五年日本加入第一回目の国際女医会へ先輩の先生方とバーデンバーデンに参加し、帰途アメリカの一人旅を楽しんで参りました。国際女医会に出席しました時、各同窓会間のわだかまりもなく現在に至る迄皆様とお親しくしていただいて居ります。

このたび、伝統ある日本女医会理事という大任を仰せつけられ、私にできることがありましたら何なりとさせていただくつもりでおります。東京オリンピックも無事済まし、来る万国博覧会に向って日本も世界に大きく羽搏たいて行くことでしょうが、日本女医会も国際女医会の一員として尚一層飛躍し、世界の日本女医会としての自負と内容の充実を計って行くよう皆様共々努力したいと念願しております。

――▼◎▲――

山崎倫子

日本女医会という立派な会はあるが、出身校や卒業年度がちがうとまるっきりおつきあいがなかったり、どこのだれかも分らない事が多いように思います。各府県、都、市、区の地域社会に於て同じ医師会に属しながら名前も知らない、勿論話をしたこともないという人が案外多いのではないでしょうか。先年総会でお引受け下さり大変お世話になった仙台や名古屋等は出身校、卒業年度を問わず、全女医が実に仲よく連絡も密にしていらっしゃるのを見聞きし、これこそ日本女医会支部のあるべき真の姿と大変羨やましく又感心させられました。同時にどこもかくあるべきと願わずにはいられませんでした。仲よくなってこそ始めて一歩前進、何か事業をしようという意欲も湧いてくるものではないでしょうか。

吉岡弥生先生ご存命の頃から外国人関係の渉外的な仕事をお手伝いして参りましたが、今回はからずも渉外担当の常任理事に選出されました。渉外といっても国外的なものだけでなく国内的な仕事も含まれるものと解釈して、前述の様に日本女医会の第一目的である親睦のために先ず努力したいと思っております。又国際的な面の仕事に関しても多くの人達のご意見を聞いたり研究して、スカッとした渉外体系を作るよう努力したいと思います。諸先輩の経験を生かし、若い会員の声に耳を傾け、皆に親しまれ、魅力ある日本女医会に育っていくように微力ながら一生懸命やって参るつもりです。前置が長くなりましたが、理事一年生で具体的に何をどうしてよいのか分らないのが実情です。ご意見ご注文をどんどん聞かせていただければありがたく存じます。諸先輩のブレーキにならないよう、又アクセルをふかしすぎて暴走しないよう努めます。会員諸姉の御支援と御鞭撻を切にお願い致します。

――▼◎▲――

柴田洋子

私ははじめて日本女医会に入会したのは、先輩役員の方のおすすめによるもので、たしか六、七年前のことかと思う。当時は深い考えもなく、ただ自分が女医であるという動かしがたい現況と、会費も大して高価なものではないのでまあ入っておいてもいいだろ

う、とそんな程度の動機であった。それに実際に大学の中での業務も忙しく、また男女共学の学内では、「女医」という特別な意識をもつよりも、「医師」という一般概念の中に自分をおいて生活していることの方が多いことも、「女医会」に対する関心をうすめていたことではある。すこし前、私よりもさらに若い後輩の女史に女医会の入会をすすめてみたところ、「医師」という役割があるのに、なぜ「女医会」という特別な団体を作らなければならないのか〃という質問をうけた。〃それもまた当然のことであるかな〃と思い、私にはあえて反論する意見もでなかったのも事実である。ところがその後のなりゆきで、今回はからずも本会の役員に任命された。〃これは大へんなことになった〃、と内心当惑したのであるが、さて、ここで坐り直して考えなければならないと覚悟した次第である。

未だかけ出しの理事で、本会の歴史を深くつきとめたわけではないが、すでに戦前から吉岡先生の創意により結成されたものであるときいている。後に国際女医会が誕生していくつかの国の同じ会が集結していったなりゆきをみる時、吉岡先生の先見の明にあらためて敬意を表したい。

さて、今期会長の三神先生の所信表明によれば、「相互の親睦」と「社会奉仕」の二点が強調されている。

これは全会員の大いなる共鳴と支援とを喚起するものと信じる。さらに私見をあつかましうするならば、私はとくに後の方の課題（社会奉仕）を大いに推進したいと考えている。

敗戦国日本の二十有余年の営々たる努力は各所にみのり、諸外国からもみとめられている上向きの姿勢にあることを思う時、我々女性、とくに技術ある者は選ばれたる者として、「日本の力」の一端を担うべき時であろう。幸に国際女医会というインターナショナルの舞台へ通じる道もできている。

では、今何をなすべきか具体案についてはこれからの役員会で少しづつ提案され、実行されてゆくことと思われるが、一般会員の方々からも大いにご意見をたまわりたい。

先年、マリオン・フェイ女史ののべられた〃我々女医の目的〃を、この期に当ってよみ返してみたが、国情の差によってかならずしも我々にあてはまらないところもある。日本独自の立場によって、一つのイデオロギーにそくした課題をもちたいものである。

「なぜ女医会がなければならないか」という文頭に記した疑問が同性の非会員や、男性医師の側から出された場合、一言にして納得させられるような理念、それは私自身まだ模索中であるが、案外それは思考の上に立つのでなく、今後の本会の歩みの中から、成就してゆく仕事の中から生まれるのではなかろうか。

そのゆえに、私は「社会奉仕」の目的にそってまづ歩いてみたいと考えている。何分にも全国の会員諸姉や、役員の方々のご指導とご支援をおねがいする次第である。

—▼◎▲—

鉄は熱い中に

杉田合

新幹線光号を利用すれば東京、大阪間三時間、東京、名古屋間二時間の今日、東京への用足しは日帰りと云うのが常識となってしまった時代において、日本女医会に地方を参加させ、地方の意見を大いに採用しようと云う三神新会長の構想のもとに生れたニューフェースとして四十二年度の初理事会（六月十八日）出席した初陣の若武者？の感じた事を卒直に述べさせて頂きます。

㈠　日本女医会理事会と云うのだから、さぞかし海千山千の諸姉の活潑な意見の交換が見られるものと期待しておりましたところ、初顔合せ的な会であったためでもございましょうが、真にお上品な婦人会的雰囲気であった事は愛知県支部のそれと比較して正直なところ拍子抜けした何やら物足りない感じをもちました。

地方から或る程度の犠牲を払って出席するからにはもっと自由活潑にしかも和気あいあいと意見の交換が出来るような、そんな雰囲気に持ってゆくべき義務がニューフェースに課せられた如き責任感が鬱勃と沸き上るのを覚えました。

㈡　吉岡弥生先生が本会を設立された第一の理由である、出身校の別なく女医が手を握り助け合ってゆこうと云うご趣旨が未だ充分には生かされてはいないように思います。役員の選出を出身校別にする事は発足当初はやむを得ないとしても、もはや今日では各都道府県支部単位にするのが理想的であると思います。と云っても北海道や九州の方を理事にと云ってもご迷惑な事で、地方としては現在の大阪、愛知、神奈川の他東京近県の日帰り可能の地区の支部の会員数に応じて割当てるべきかと考えます。

来年度より会則が改正されますので、本会発展のためにまづ総べて役員の出身校別選出の制度を改むべきと思います。至誠会は会員数も多く今後も益々増加致しますので、この方法で致しますと、結果的には或は至誠会員が最多数を占める事になるかも知れませんが、私は日本女医会を至誠会員で独占しよう等というケチな了見の持主ではございません。日本女医会では仙台と名古屋を見習うべしと云われておりますが、愛知県支部におきましては、森川支部長の統率のもとに今更出身校別などと云うことを云々する事は可笑しくってという位うまくいっております。その点も大いに見習っていただきたいものと思います。

「青洲の妻」雑感

五島瑳智子

「華岡青洲の妻」がベストセラーになった。テレビ、映画、芝居とまさにブームである。この本が出た時、青洲が我が国での麻酔の先駆者ということから、早速一読に及んだが、その時には、これ程のブームになるという予想はなかった。しかし日本におけるこの時代の嫁と姑、小姑の映像をうきぼりにした内容は、かんじんの青洲が書ききれていないというらみはあるとしても、さすがにあざやかである。

女性がいかに才能があっても、それをもって自己を表現する場のなかった時代には、夫の、あるいは息子の中にしか自分を生かせなかったであろう。女は何々夫人、誰々の母堂というように呼ばれる以外、自分自身の価値でよばれることは全く稀であったのである。凡庸な女性ならばともかく、「おつぎ」のような女性は、その才をもっと広い大きな場所で延ばすべきであった。それができなかったのは、この時代に生きた女性の不幸である。

おつぎか、あるいは加恵のどちらかがもしもかりに女医であったとしたら、このような設定はなり立たなかったであろう。青洲も恐らく自分の研究の普遍的な目的を二人の女性に話すこ

ともせず、単なる実験材料とすることはなかったのではないだろうか。

日本での最初の女医は、長崎に鳴滝塾を開いたドイツ人、シーボルトの遺児、楠本いねであるが、彼女は混血児という特殊な事情からも、当時はなみなみならぬ困難を背負っていたと想像される。何段階かのステップをのりこえて、今や女性も自由に自分を試みることができるようになった。そこにはもはや数々の先人の歩みのような使命感や、悲壮感はみられない。

日本女医会は会員四千人をようする大きな会に発展した。この会の存在理由は、会員相互の親睦と社会奉仕であるという。この大きな目的を、親睦のみに終らせないために、あまりに微力な新米の一会員として、まさにウイルスの武者振いとでもいいたいようなものを感じるのである。

それは怠惰な自分へのいましめでもある。

石川県支部だより

早稲田　かめの

「日本女医会石川県支部初代支部長故荒井梅子女史は石川県内女医の草分けとして八十才の生涯を終えるまで四十九年間、（金沢市安江町二十六番地）旧象眼町六十九番地において診療に従事されました。早くより仏門に帰依し一生独身を通され、高潔な人格、溢れるばかりの温情の持主であり、絶えず陰徳を積まれ努力の人として終始されました。今年は女史の三回忌と当支部結成十周年を迎えますので、会員一同より観音像をゆかりの栄昌庵に寄進して、仏と共に永遠に生きる願いをもこめてその徳を偲びあいたいと存じます。」

↑「慈光」聖観音菩薩像開眼式
日本女医会石川県支部
昭和42年6月11日

これは当支部今回の記念事業趣意書の内容でありますが「慈光」観音菩薩像開眼式は去る六月十一日金沢市西町栄光庵でおごそこに行われました。

他に類例のない美挙と各界の注目を浴びました。

製作には当支部会員の夫君がたまたま金沢大学に勤務中の日展作家でありますので、奉仕を引き受けていただきました。今後当支部の象徴として故荒井梅子姉の遺徳を偲ぶよすがとして仰いでゆきたいと存じます。

千葉県支部だより

平松　麗子

千葉県支部は七月九日（日）千葉市京成レストラン五階において、田島喜美子新支部長初の総会を開催した。出席者は花岡姉、犬飼姉両顧問を始め、町田、加納、本橋、久田、今井、木原、中川、松村、和顕、高室、作田、田島、田那村の諸姉と平松の計十六名であった。

当日は森下製薬の協賛のもとに「心臓の手術」の医学映画供覧のうちに、本部より国際的にご活躍でご多忙な中を、小野春生先生のご来駕を得、先づ田島支部長の就任挨拶、議事並びに報告をもって始まり、和やかな雰囲気のうちに、昼食コースもデザートに入り、小野先生のいつもながらの明るいご様子での座談的なお話ぶりに一同楽しく拝聴し、また色々と質問申し上げ、とても活気に満ちた話題に花を咲かせる事ができた。お話の内容は欧米諸国及び東南アジア諸国における、女医の方々の活躍ぶり及び各国民性による物の見方、考え方の相違等非常に興味深いものであった。

ただ意外に思った事は欧米の先進国が社会的習慣は別として、実質的には案外封建制が強く、むしろ東南アジアの低開発国程男女同権であり、女医が社会的に非常に活躍しているとの事、また上流社会の金持連が社会的事業に関心が強く、色々な事業に寄付を惜しまないとの事など、吾々も大いに国際的な視野に立って善い事は学びとって行かねばならないとつくづく考えた。

その後自己紹介の折り各自本会に対する意見、希望を発表していただき、学術講演、その他一般教養を高めるための策を講じる事、また人事（結婚問題、看護婦、代診等）の斡旋あるいは楽しいリクリエーション、また老人ホームの建設等皆様の真意を知る事ができ、夢は大きく拡がり、多いに語り合い、時の移り行くのも忘れ定刻を過ぎる事一時間半をもって散会した。今日まで先輩諸姉の育くまれて来たこの支部を、今後ますます諸姉のご希望にそって前進に導くよう、一名でも多くの参会者がふえるよう、会員諸姉のご協力を念じつつ心も引締る想いで帰途についた。

会費十ヵ年分前納者

寺尾　澄恵　青木　昌子　丸山きよ子
山田　規子　石原　道子　中本かつ子
富岡　ノブ　村松　忠子　柳瀬　好子
田中　ひさ　玉置　政子　船曳　和子
宗像　美恵　後藤　幸子　江口　寿子
浜田登茂子

○会費十ヵ年分（壱万円）前納にご協力願います。前納分を東京女子医大学校債に預け入れ、本部会計の大なる財源となっております。

≪訂正≫　前号掲載、名鉄観光の広告中、期間十二月二十九日～一月十四日は一月四日までの誤りです。

編集後記

一天俄かにかき曇り、大粒の雨が降り始め雷鳴が轟く中で、臨時理事会が行われ、その後今期始めての編集会議が開かれました。

その結果、編集員全員で、力を合わせてとのスローガンのもとに次の如くきまりました。第三十一号（今号）は中西、石田、三十二号よりは、森、阿部（十一月）栗原、柴田（二月）柳瀬、湯本（五月）の順で仲よく二人づつそれぞれの分担の日本女医会誌の編集に責任をもって当る事になりました。

本号は新理事の方々の抱負をのべていただく予定でしたが、いろいろ雑文も加わり、バライティにとんだ挨拶となっております。

又石川県よりの荒井梅子女史を称えての慈光観音菩薩開眼式、ついで千葉県の支部便りなどいずれもありがたく拝見しました。他の支部よりのお便りをお願い致します。

尚今後は日本女医会の歴史とか紀行文のような諸先生方の開いておられる特殊病院又は施設の紹介などの続き物もいかがかと思っております。

この会誌への新しいアイデアをお待ちしております。（中西・石田）

昭和四十二年八月二十日印刷
昭和四十二年八月二十五日発行
編集人　福田　幹
発行人　日本女医会
発行所　東京都新宿区市ヶ谷河田町19　日本女医会
印刷所　東京都港区麻布田島町63　興栄美術印刷株式会社
題字　吉岡弥生